



水しか出ない神具【コップ】を授かった僕は、 不毛の領地で好きに生きる事にしました 2

α L P H α L I G H T

長尾隆生

Nagao Takao

アルファライト文庫





ヒューレ

シアンが保護した大エルフの少女。
かえん
可憐な見た目に反して
大酒飲み。

エンティア

シアンの専属教師。
基本的に無表情だが、興味のある
事柄には笑顔を見せる一面も。

メディア

天才けどちょっぴり
性格が残念な医師。
研究と植物が好きすぎる。

ベルジュ

明るく元気な町の
宿屋の看板娘。
ナデナデの腕が超一流らしい。

バタラ

やさ
心優しい町娘。
さび
寂れた町を復興しようとする
シアンの手助けとなる。

シアン

本作の主人公。水しか出ない役立
たずの神具【コップ】を授かったせいで、
不毛の領地に追放されてしまう。

Main Characters

主な登場人物

第一章 新たな力と新たな住民と

僕、シアン||バードライは、女神様から水しか出ない神具【コップ】を授かり、実家の大貴族家に見放されて不毛の領地、エリモス領に追放されてしまった。

どんぞこに叩き落とされた僕だったが、信頼できる家臣たちの助けもあり、エリモス領の領主として生きていくことを誓う。

そして訪れたエリモス領唯一の町、デゼルトで僕は【コップ】の真の力を知ることになる。

その正体は【聖杯】というもので、水だけでなくあらゆる液体を複製できるという能力を持つていたのだ。

僕はこの能力を使って、デゼルトに住む全ての民を幸せに導くことにした。

かつて僕が女神様から受けた神託に従うために。

そして何より、僕がそうしたかったから。



『条件を満たしました。【聖杯】の力が一部開放されます』
魔獣シーヴァの試練を乗り越え遺跡探索の打ち上げをしていた時、僕の脳内にそんな声が響いた。

その時は打ち上げの最中だったこともあり、すぐに開放された力を調べることはしなかったのだが、それから数日後の昼下がり。

およそ一ヶ月ぶりとなる収穫祭の準備で朝からみんなが走り回る中、僕は一人、領主館の休憩室でスキルボードを出現させ、新しく開放された能力について調べていた。

過去にも僕は、同じ声を聞いたことがあった。その時は、民を幸せにすることで獲得できる『幸福ポイント』という数値を使うことで、【コップ】に登録している液体の品質を改良させられるという能力が開放されたのだ。

そして僕は、試しに一番消費ポイントの少なかった【水】の品質を改良したつけ。

そして出来上がったのが【おいしい水】という改良品だったのだが……あまりに美味しすぎて中毒性が出て、危うく大変なことになるかけたのである。

それからもう一つ、【コップ】から出せる【砂糖水飴】も品質改良してみた。

こっちの方は特に中毒性が増すことはなく、単純に純度が上がったただだった。そのおかげで【砂糖水飴】が、時間が経っても濁らなくなった。

料理長のポーヴァルによれば、普通の砂糖水飴には糖以外の物質も含まれていて、それが結晶化するせいで濁りが出るのだという。

「ただし、純度が増したからといって、味がよくなるというわけでもないですよ。料理や菓子にはむしろ普通の【砂糖水飴】を使った方が、美味しいものが作れるんですがね」
ポーヴァルはそう言っていたが、砂糖水飴を交易品として他の町に運送する行商人のタージェルは、純粋に濁りが出なくなったことを喜んでいた。

「やはりお客様は、濁りがあるものは買いたがりませんし」

なんでも、濁った【砂糖水飴】はかなりの安値で買い叩かれることもあったらしい。味より見た目を優先する気持ちは僕にもわかる気がする。

ただ、改良された【砂糖水飴】を作製するには、通常よりも消費魔力が大きくなってしまふ。

今の僕の魔力なら特に問題はないが、何かあった時のために節約を心がけることは大事だ。

というわけで、交易には改良品を出し、普段使いする分は通常品を出すことにしたのである。

そんなことをつらつらと思い出しながら、僕はスキルボードに目を向ける。

「さて、今回開放された【聖杯】の力とはどんなものかな」

独り言を口にしながら、スキルボードに顔を近づける。

「使い勝手がいいものだといんだけど」

まずは、ボードの一番下にある非常に小さな文字に目を凝らした。

相変わらず見づらい『幸福ポイント』は、1126ポイント貯まっている。

「前に見た時より、増えているな」

このポイントを使えば、試験農園を管理しているメディア先生が熱望する【水肥料】の品質改良を行うことも可能だろう。彼女は僕の能力を知ってから、何かにつけて改良を要求してくるのだ。

今までは「ポイントが足りないから」と断っていたけれど、これだけあるなら叶えてもいいのではないだろうか。

実のところ、この『幸福ポイント』がどういった仕組みで増えるのかは、未だによくわかっていない。

言葉通りに『民がどれだけ幸福になったか』を表す評点だとは思いが……

「いまいち基準がわからないんだよ……とにかく、僕が領民を幸福にすればするほど数値が増えるだけ思っておけばいいか」

ただ、それだともらえるポイントには限界がありそうな気がする。

もちろん僕は、これからも領民が幸せになるためなら努力を惜しむつもりはないが、ま

だ詳しいことがわからない以上、無駄遣いはできない。

あれこれとポイントを消費して、本当に必要な時に足りないなんてことになるかもしれないからだ。

「って、そんなことを考えるのは能力がどんなものを調べてからだな」

大体、新しく開放された能力が、ポイントを使うものだとは限らない。

それにしても……女神様は少しくらい、スキルボードの使い方の説明を僕にするべきだと思う。

毎回毎回、新しく開放された能力を手探りで探すところから始めないといけないのは大変だ。

その上、見つけた能力の使い方を、その都度調べないといけないのだから不便にもほどがある。

スキルボードを操作していると、時々思うことがある。

もしかしたら僕が見つけていないだけで、今使っている能力には他の使い方もあるのではないかと。

それどころか、使い方が間違っているのではないかとすら思う時だってある。

たとえば品質改良の力は、僕が正しく使えていないから扱いにくいと感じているのではないか。

「この【コップ】を授かった時に、説明書もつけてくれればよかったのに……」
僕は小さくため息をついた。

気を取り直し、スキルボードをじっくりと見て何か変化した部分がないか探していく。
今回は一体どんな能力が追加されているのだろうか。

見落しのないように目を凝らすと、今回は思っていたより簡単に見つけることができた。

スキルボード上部の右端に、四角いボタンのようなものが追加されていたのである。

「このボタンは確か、今まではなかったはず」

ボタンには何やら文字が書かれていたので、僕はそれを読んでみた。

「えっと、『神コップ作製』……『神コップ』ってなんだろう」

もしかして……【聖杯】のことか？

僕は手に【コップ】を出現させて眺める。

「確かに【聖杯】は色々なものを複製できるけど、これと同じ神具まで作り出せるものなのか？」

もし【聖杯】と同じ神具を何個も作れるとしたら、それはもはや神の力そのものだ。

「いや……【聖杯】じゃなくて『神コップ』って書いてあるんだから、たぶん違うんだろう。【聖杯】が作れるなら『聖杯作製』とでも書かれているだろうし」

僕は一旦その結論を出し、ボタンにゆっくりと指を近づける。

「とりあえず悩んでいても仕方ない。いつも通りに試してみるしかないよね」

そう独り言を呟きながら思い切つて、『神コップ作製』ボタンを押す。

すると、スキルボードの上に、小さいボードが新たに浮かび上がった。

「お、次の選択肢が出てきた。こういうところは親切なんだよな」

小さなボードには、こう書かれている。

『幸福ポイント1000を消費して【サボエール】の『神コップ』を作製しますか？ は

い・いいえ』

表示された文章を読んで、僕は首を捻る。

これは一体どういう意味だろう。

サボエールがお酒なのはもちろん知っているが、その『神コップ』？

それも謎だが、作製するために『幸福ポイント』が1000も必要なのも驚きだ。

「こんなにポイントが必要なんじゃ、試してみるのにも勇気があるな」

なんせ、現状の『幸福ポイント』は1126しかないわけだ。

1000ポイントも消費してしまうと、残りはほとんどなくなってしまうことになる。せめて200ポイントくらいなら気軽に作製してみてもいいのだが……

「待てよ。もしかしたら……」

僕はあることに思い当たり、一旦『いいえ』を選択してボードを閉じる。

そしてもう一度スキルボードを操作して、『コップ』から出すものを『サボエール』から『水』に切り替えた。

その状態で、もう一度『神コップ作製』のボタンを押してみる。

すると――

『幸福ポイント400を消費して』『水』の神コップを作製しますか？ はい・いいえ』

やはりだ。

どうやらポイントの消費量は品質改良と同じく、選択したものの種類によって変化するようだ。

そしてこの能力は、スキルボードで選択した液体の『神コップ』とやらを作ることができると。

問題はその『神コップ』が何かということだ。

「こればかりは作ってみるしかないけど……水以外の消費ポイントも確認しておくか」

一応全ての液体を調べてみたが、やはり『水』が最も消費ポイントが低かった。

お試しとしては、一番ポイントが少ない『水』の『神コップ』を作製するのがいいのはわかつてる。

だけど、せっかくポイントを使うのなら、他のものの方がいいのではないかと。

あれこれと思案^{しあえ}しつつ、スキルボードの『はい』の前で指をさまよわせていると、不意に誰かが僕の背中^{しめ}を叩いた。

軽くぼんつと叩かれたただけだったのだが、考え事をしていた僕は、思いもよらない刺激にびくつと反応し――

「うわっ」

ぼちっ。

勢い余って思わず『はい』を押してしまった。

そして僕の脳内に、『幸福ポイントを400消費して』『水』の神コップを作製しました』という声^{こゑ}が流れる。

しまった！

そう思ったが、もう時既に遅^{おそ}し。

スキルボードに表示されている幸福ポイントの数字は、一気に400減^へって726になった。

「もう、誰だよ！ 突然背中を叩いたのは！」

僕はつい大きな声でそう言って、振り返る。

そこにはシーヴァを抱^だつこしながら片手で前足を持ちながら、驚きの表情を浮かべた町娘のバタラと、その後ろでやや目を丸くしたメイドのラファムの姿があった。

今まで彼女たちに大声を上げたことはなかった。

だから僕がそんな態度を取ったことに驚いたのだろう。

スキルボードの見えない彼女たちには、僕はただぼーっとしているだけに見えたに違いない。

そんな僕を少しだけ驚かせようと、バタラは軽いイタズラのつもりでシーヴァの肉球を

背中に軽く押しつけたようだ。

そう理解した時、彼女の瞳にじんわりと涙が浮かんだ。

『あーあ、泣かせたのじゃ』

シーヴァが念話を送りつつ、彼女の腕からするりと抜けて地面に下りる。

「あつ、あのっ私つ……シアン様と一緒に収獲祭に行こうと思つて声をかけよう……」
震えた声で言つて背中を向けた彼女の手を、僕は慌てて掴む。

「違ふんだ。僕は別に怒つたわけじゃなくて、ただびっくりしただけで。だから泣かないでくれ」

「ごめんなさい、私も少し驚いてしまつて……」

「いや、謝らなくていいんだ。むしろ僕の方こそ大声を出して本当にすまない……」

必死にバタラをなだめる僕を、シーヴァとラファムはフォローもせず、面白そうにニヤニヤと眺めている。

こいつらにはあとでじっくりと説教せねばなるまい。

「怒つていませんか？」

「ああ、怒つてないとも。本当に弾みで大声が出てしまつただけで」

新しい能力を確認するために、どうせ『神コップ作製』はやらなければならなかったことだ。

それをポイントを無駄にしたくないと長々と無駄に悩んでいた僕の方が悪い。

「だから涙を拭いてくれないか。君の泣き顔を見るのは、なんというかその……辛いからさ」

そう言つて僕はハンカチを渡す。

「……はい」

バタラはそう答えると、目尻に浮かんだ涙を受け取つたハンカチで拭いて少し頬を赤らめつつ微笑んでくれた。

僕はなんとなく彼女を直視できず、少し顔を背けながら説明する。

「実は【コップ】の新しい力が開放されたから、それを試そうとしていたんだ」

「新しい力……ですか？」

「ああ。『神コップ作製』という能力らしいんだけど、それがなんなのがわからなくてさ」

そういうえば、先ほどの出来事で【水】の『神コップ』とやらは作製されたはずだけれど、一体どこにあるのだろう。

もしかしたら、作製と言っても実際に物質化するような能力ではなかったのだろうか。確かめるためにもう一度スキルボードに変化がないか確認しようとした、その時。

「わふんっ!!」

足下からシーヴァの鳴き声がしたかと思うと、脳内へ『これか?』という念話が飛んてくる。

なんだと思つて下を向くと、何かを口に咥えた状態でお座りしていた。

「それ、どこにあったんだ?」

形状からしてどうやらコップのようだったが、僕の【コップ】よりも見た目がかなり安っぽい。

『お主が情けない悲鳴を上げて跳び上がった時に、足下に落ちるのを見たのでな』

『悲鳴なんて上げてないだろ』

脳内でシーヴァに反論しつつ、コップを受け取って調べてみる。

重さはほとんど感じない。

強度は少し力を入れるとへこむほど柔らかく、質感からしてもこれは――

「紙?」

そう、それは紙で作られたコップであつた。

だが、紙は水に弱い。濡れる可能性のある用途では普通、羊皮紙が使われる。

そんな素材でコップを作るとは……

「神の御業……つてやつか?」

しかしこれでは『神コップ』ではなく『紙コップ』じゃないか。それに、こう言つてはなんだが、見た目も貧相だ。

僕の【聖杯】もそうだけど、女神様はあまり見かけにはこだわらないのだろうか。

そんな風に思つていると、バタラが僕の手元を覗き込んで尋ねてきた。

「そのコップが新しい力なのですか?」

「たぶんね。僕の知る限り、紙製のコップなんて見たことも聞いたこともない。ラファムは知つてる?」

「いいえ。そもそも紙でコップを作ることに意味があるとは思えません。それなら普通に焼き物で作った方が安上がりですし、見かけも美しいでしょう」

「だよなあ」

しかし、あれだけのポイントを消費して作製されたものが、意味のないものだとは思えない。

一体この『神コップ』とはなんなのか。

液体の指定があったからには、【水】に関する何かがあるのだとは思うが……

すると、バタラがこちらに手を差し出してきた。

「少しそのコップを見せていただいてもよろしいですか？」

「いいけど、結構柔らかくてあまり力を入れるとへこんでしまうから、一応注意してね」

「はい」

『神コップ』をバタラに手渡すと、彼女は不思議そうに眺め始めた。

「中には何も入っていませんね。裏に何かあるのでしょうか？」

そして彼女が『神コップ』を逆さにした時――

ザバーーーーーーッ。

「きゃあっ！」

「うわっ」

「シアン坊ちゃま！」

「ぎゃわんっ!!」

突如として『神コップ』から水が流れ出し、下で様子を見ていたシーヴァを直撃した。

傾けると水が出てくる――それは僕が【コップ】を使って水を出すのと同じような現象だった。

「あああつ、ごめんね、シーヴァちゃん」

バタラは、ぶるぶるぶるつと水を飛ばすシーヴァの横にしゃがみ込んで謝っている。

僕は今思ったことにもしやと思い、彼女に声をかけた。

「バタラ、もう一度だ」

「えっ？」

「もう一度そのコップを傾けてみてくれないか？」

バタラは僕を見上げて、きよんとした。

「またシーヴァちゃんに水をかけるんですか？」

「お主、海より心の広い我でも、わざとぶっかけられたらさすがに許さぬぞ。といつても海なんて見たこともないのじゃがな」

そうか。

シーヴァは海を見たことがないのか。

いや、今はそんなことよりも『神コップ』だ。

「違う違う。シーヴァはどうでもいい」

「わふっ!!」

『どうでもいいとはなんという言い草じゃ!!』

抗議の念話を送ってくるシーヴァを無視し、僕はバタラの手に握られている『神コップ』を指さして言う。

「さっきのを見ただろ。その空^{から}っぽの『神コップ』から、僕の【コップ】と同じように水が出たのを」

「そういえばそうでしたね。シーヴァちゃんにばかり気を取られちゃいました」

『我の愛らしさは世界一じゃから、それも仕方ないのう』

自慢げに水に濡れたままの胸を張るシーヴァは、相手にしないでおう。

僕はバタラの手を取って立ち上がるのを手伝い、その手ごと『神コップ』を傾けさせた。すると、先ほどと同じく水が流れたのだ。

「これって本当に——」

「ああ、僕の【コップ】と同じ力だ……けれど、その『神コップ』からは【水】しか出ないはず」

「そうなのですか？」

「ああ、たぶんだけどね」

そうじゃなければ、種別ごとの『神コップ』が作れることに説明がつかない。

「ちよつと貸してくれるかい？」

僕はバタラから『神コップ』を受け取ると、元の【コップ】の方を消してから『神コップ』のスキルボードを開くつもりで意識を向ける。

すると、小さなメッセージボードが目の前に浮かんだ。

どうやら『神コップ』のステータスみたいだが……

『神コップ【水】 魔力 98』

魔力？

【コップ】のスキルボードにはなかった表示だ。

いや、もしかしたら隠^{かく}れていて見えていないだけかもしれないが……まあ、そこは考慮^{こうりょ}しなくてもいいか。

「ちよつと待てよ？ もしかして……」

独り言を呟^{つぶ}き、僕は手に持った『神コップ』を傾けて、しばらく地面に水を流し続ける。それからもう一度、同じように意識を『神コップ』に向け、ステータスを表示させた。

『神コップ【水】 魔力 95』

やはり思った通りだ。水を出した分だけ、魔力が減っている。

『神コップ』は、中に貯められた魔力を使って、作製する時に選択した液体を生み出すことが出来る道具なのか。

これはかなり便利である。

たとえば、これを持ち運べば狩りに出る際に重い水樽を運ぶ必要がなくなる。

先日の狩りでは、ほぼ無限に水を出せる僕が同行したことで水樽を輸送しなくて済んだが、毎回付いていけるわけではない。

しかし、今後は『神コップ』を渡しておけば、僕がいなくとも水の心配がなくなる。もちろん、出せる水の量には限界があるが、役に立つことには違いない。

他にも【サボエール】や【砂糖水飴】の『神コップ』だって、作製してドワーフたちやタージェルに渡せば喜ぶだろう。交易もこれだけでこと足りるかもしれない。

『幸福ポイント』との費用対効果も考えなければならぬが、できることが一気に増えたのには間違いないな。

「これは凄い能力だよ、バタラ」

「そうなんですか？」

「ああ、『コップ』の力を誰でも使えるようになるんだからね」

ただ、気になるのは魔力という値だ。

『神コップ』から水を出すと、魔力が減ることは判明した。おそらく、ゼロになれば水は出なくなるだろう。

「問題は、『神コップ』に魔力を補充して再利用が可能なかどうかだな」

「魔力……ですか？」

「ああ、この『神コップ』にはどうやら元から魔力が込められていて、それがなくなると水が出なくなってしまうみたいなんだ」

『神コップ』の作製には、少なくない量の『幸福ポイント』が必要になる。

仮に魔力を補充できない場合は使い捨てということになるが、それだとさすがにコストが高すぎる。誰でも使えるという利点はあるが、毎回『幸福ポイント』を大量消費すると考えると、安々と使うこともできない。

それに、結構魔力の値が減るのも速い。

先ほど傾けた時に流れた水の量と魔力の減り具合から予想すると、たぶん樽二つくらいの水を出したら空になって使えなくなりそうだ。

他にも、【水】以外の液体は消費魔力量もつと多い可能性もある。それを調べるためには他の『神コップ』を作成しないといけないが、今はポイントが足りないので確認できない。

とりあえず、『神コップ』から出せるのは樽二つくらいだろうとバタラに伝えたら、こう言われた。

「でも、それだけあれば十分なのではないでしょうか？」

「確かにそうかもしれないけど。どうしても自分の【コップ】基準で考えてしまうんだ

よな」

「どちらもしアン様の素晴らしいお力ですよ」

バタラはキラキラした目で僕を見つめた。

僕は彼女の純粹な瞳から視線を背けて眩く。

「僕の力というより、女神様の力なだけだね。僕自身はそれを利用してもらっているだけに過ぎないよ」

「でも、それを活用して私たちを幸せにしてくれているのは、シアン様ですから」

バタラはそう言い、ぎゅっと両手で僕の手を握ってきた。

彼女の手のぬくもりに、僕はかなり焦ってしまふ。

「わ、わかったから手を放してくれないか。ラファムがニヤニヤしながらこっちを見てるからっ」

「坊ちゃまも大人になられて……よよよ」

「ラファム！ 嘔泣きをするんじゃない！」

「やれやれ、若いのう」

「と、とにかくだっ」

僕はバタラの手をほどき、数歩後ろに下がって『神コップ』を両手で握る。

「今から大事な実験をするから、少し離れていてほしい」

「坊ちゃま、お顔が真っ赤ですよ」

「ラファム、うるさいっ」

僕はしばらくの間深呼吸をして心を落ち着けてから、『神コップ』に意識を集中して、魔力を流し込むイメージをする。

すると、手のひらからゆっくりと『神コップ』に僕の魔力が流れていく。

魔力は目には見えないが、その流れは感じる事ができるのだ。

そして魔力がある程度流してから、確認のためにステータスを表示させる。

「やった！ 成功だ」

画面を見て、僕は思わずガッツポーズをしてしまった。

僕の喜びようを見て、ラファムとバタラが目丸くする。

「坊ちゃま？」

「ど、どうしたんですか？」

「成功したんだよ。『神コップ』への魔力の補充が！」

『神コップ【水】 魔力 100』

メッセージボードには、その文字が燦然と輝いている。

どうやら100が上限で、それ以上は補充できないようだ。
これで『神コップ』への魔力の補充は可能であると判明し、同時に使い捨てではないことが確定した。

となると、他の『神コップ』の作製も視野に入れなければならない。

たとえば【砂糖水飴】や【水肥料】なんかはほぼ毎日使うものなので、『神コップ』があれば何かと便利になるだろう。サイズが小さいから、持ち運びしやすいのもいい。

何より魔力さえ補充すれば、僕が出向かなくてよくなるのは最大の利点だ。

そんなことを考えていると、休憩室の外から執事のバトレルの声が聞こえた。

「坊ちゃん。そろそろ収穫祭にお出かけする時間でございますが、準備はよろしいでしょうか？」

いつの間にか、収穫祭に行く時刻になっていたらしい。

「ああ、すぐに行くよ」

バトレルにそう答えて、僕はバタラとラファムの方を向いて言った。

「さてと、バタラ、ラファム。二人とも準備はいいかい？」

「私ですか？」

ラファムが驚きの声を上げる。

彼女は僕がバタラと二人きりで収穫祭に向かうのだと置いていたようだ。

護衛として後ろからこっそり付いてくるつもりだったのだろうが、そんなのはつまらない。

僕はバタラとラファムの目を交互に見ながら口を開く。

「もちろんさ。ただし……」

僕は少し意地悪な笑みを浮かべ……

「二人とも、今回は前みたいに酔っ払わないでくれよ」

そう口にしたのだった。



収穫祭は大いに盛り上がった。今回の狩りでは前回よりたくさんの獲物が手に入り、その分規模が大きくなったのだ。

また、今回の祭では、目玉企画として酒の飲み比べ大会が行われた。そこでは優勝候補と目されていた大工の家臣、ルゴスが飛び入り参加の町人に負けるという大番狂わせが起こったのだとか。かなりの名勝負だったらしく、翌日になっても町中がその話題で持ちきりだった。

その頃、僕はバタラと屋台巡りをしていたので、勝負の様子を見ることはできなかった

のが今となつては少し悔やまれる。

しかし、酒豪しゅこうのルゴスを負かす人物がいるとは驚きだ。

その話を聞いた時は、世の中にはとんでもない逸材いつざいがいるのだなと感心したが、よく考えれば大酒飲みの才能なんてなんの役に立つのかわからない。

さて、収穫祭から一夜明けた今日、僕は領主館の前でシーヴァと一緒にのんびりと過ごしていた。

シーヴァは昨日の収穫祭を大らしく楽しんだあと、棲み処すゐどころの遺跡に帰るのかと思つたら、そのまま領主館に付いてきて夜を過ごした。今日も帰ろうとしないところを見ると、しばらく居座いすわるつもりようだ。

「シーヴァ、帰らなくていいのか？ 遺跡の管理とかがあるんじゃない……」

隣となりでお座りしているシーヴァにそう聞くと、尻尾しっぽを振りながら念話で返答する。

『ま、当分は放つておいても大丈夫じゃ。我はもう少しこの町にいることにする』
当分とはどれくらいだろうか。

気になったが、遺跡の製作者自身が大丈夫だと言うのだから大丈夫なのだろう。

だが、あまり樂觀視らっけんしするのもよくない。

もしシーヴァが遺跡いせきを留守るすにしたことで何かトラブルが発生したら、その時にはきちんと責任を取ってもらおう。

僕は「何かあったら責任は取ってもらうからな」と告げ、【コップ】のスキルボードを表示する。

【水】の『神コップ』を作製したことで減った『幸福ポイント』は、今は1321ポイントにまで増えていた。

収穫祭が盛り上がった結果と考えてよさそうだ。

領民たちが幸福を感じれば感じるほどポイントが加算されていく仕組みは、ある意味ではわかりやすい。

これからも領民を笑顔にできるように、領主として頑張がんばらねばと改めて決意した。

その時、隣で暇ひまそうにしていたシーヴァが話しかけてきた。

『ところで、さつきからずっと気になっていたのじゃが、あの者たちは何を運んでおるんじゃない？』

「ああ、あれは魔獣の血だよ」

僕たちの立っている前方では、護衛のロハゴスや町の男衆が大きな樽を軽々と持ち上げて領主館に運んでいた。中には先ほどシーヴァに言った通り、魔獣の血が詰められている。

今回の狩りでは、魔獣の血をできるだけ持ち帰ってほしいと頼たのんでおいた。魔獣の血は、僕の【コップ】では複製できず、なおかつ魔力回復ボーションの素材となるためだ。

収穫祭で振る舞われた分を除いて僕が全て買い取ったので、町の人たちは収入が増えた

と喜んでいた。

魔力回復ボーションはデゼルトの町の未来を担う交易品であり、この先領地を發展させていくための資金源でもある。それが大量に手に入ることは、僕にとっても喜ばしい。

ちなみに、予算はタージェルを通じた交易のおかげでそれなりに余裕があったので、少し多めに資金を出した。

これは感謝の気持ちという意味もあるが、町で出回る貨幣の量を増やして流通を活発にさせようという狙いもある。町が豊かになれば、訪れる行商人の数も増えるはず。ゆくゆくは、人も物資も多く集まるようにしたい。

人が増えれば問題となるのは食糧事情だ。

デゼルトの町や僕が領主を任されているエリモス領は砂漠地帯のため、食べ物が少ない。基本的に保存の利く魔獣の肉で食いつないでいるが、野菜に関しては、作物が育たず貴重なため配給制度が取られているほどである。

ただ、その問題も解決の見込みはある。メディア先生が開発した魔肥料を使えば作物の成長スピードが速まるので、近いうちに食糧事情は改善されると思っている。

「そういえば、魔獣の肉が腐りにくいのではなせなんだろう」

僕が呟くと、シーヴァがそれを聞いて答える。

『それは、魔獣の肉に強い魔力が残っておるからじゃのう』

「魔力？」

『うむ。今日の我は気分がよいから、詳しく説明してやつてもよいぞ』

「ありがたいけど、上から目線なのが気になるな……ところで、どうして気分がいいんだ？」

『お主とこうしてだらだら過ごす前、我は町を散歩していたんじゃが……そこで凄まじいナデナデの腕を持つ者と出会ってな』

ナデナデの腕というのはよくわからないが、ようするにその人に撫でられて気持ちがよかったということか？ そう聞くと本当の大みたいだな。

「それって誰なの？」

『名前はわからんが……ほれ、ドワーフ共が泊まっている建物に住んでおる十歳ほどの娘がいるじゃろ』

「ああ、宿屋のベルジュちゃんか」

今はほとんど外部との交流がなくなったデゼルトの町にも、一軒だけ宿屋が存在する。

聞いたところによればその歴史はかなり古く、この町に王国の大溪谷開発部隊がやってくる以前から営業している老舗なのだそうだ。

ただ、ここ何年かは宿屋に泊まるのはタージェルとその家族くらいで、日頃ベルジュちゃんの両親は他の町の人たちと同じように痩せた土地で畑を耕したり、食糧の保存や加

工をしたりしているのだとか。

ベルジュちゃんの仕事は、両親が働きに出ている間、宿屋にいつもお客が来てもいいように掃除することだと聞いている。

『そうじゃ。最近はどうワフ共が宿を取っているおかげで手伝いが忙しいと言っておつたな』

「あの子は働き者だつてバタラも言つてたからね。シーヴァも迷惑めいわくかけないようにしときなよ」

『それはわかつてはいるのじゃが、あの子のナデナデはこの町で一番見事だな。何回も通つてしまふかもしれん……ところでお主、いつの間に我を呼び捨てにするようになったのじゃ?』

ああ、最初に魔獣の姿で会つた時は「シーヴァ様」なんて呼んでいたつね。

その時のことを懐かしく思いながら、僕は答える。

「バタラたちにナデナデされて、恍惚こうつとした表情で尻尾を猛烈もうれつに振っている姿を見てからかな」

『……本能には逆さからえんのじゃ。まあ、それはそうと話を戻すが、お主は魔力をどんなものだと理解しておるのじゃ?』

魔力か。

「人間の貴族と魔獣、あとはドワーフやエルフといった亜人種あじんしゆが持つ、魔法や魔力を必要とする神具を使うための力……だよな?」

『ふむ。お主の認識はかなり間違つておるぞ』

『そうなの? 一応今までのいろんな本や先生から学んできた知識なんだけど』

『まず一番大きな間違いを訂正ていせいしておくと、魔力自体はどんな人種も持つておる』
「えっ!」

僕が今まで教わつてきた話では、貴族以外の平民には魔力がない。

だから女神様の力が使えないのだと聞いていた。

女神様の力を授かるための成人の儀ぎが貴族階級にしか行われないのは、平民が行つても何も起らず、むしろ女神様の怒りを買う結果になると言われているからだ。

けれどこの町にやってくるから、僕がこれまで習つてきたことには嘘うそや偽りいつわが多くあると気づかされた。

魔力に関することとそれらと同様、何者かによつて作られた嘘うそだとか……
シーヴァは説明を続ける。

『この町の住民も、お主の配下も、皆平等に魔力を持つておる。まあ、お主は中でも飛び抜けておるがの』

「僕はずっと魔力量上げる訓練くんれんを独自どくじにしてきたからね」

『ほほう。どのような訓練かは知らぬが、一体どこでそんな知恵を得たのじゃ?』
 「小さい頃に偶然出会った不思議な人に教えてもらったんだよ」

僕は今も世界のどこかを放浪ほうろうしているであらう、その人のことを思い浮かべた。
 結局最後まで名前も教えてもらえなかったが、幼かった僕はその人を『師匠』と呼んで慕したっていたものだ。

師匠は、貴族社会の常識しか知らなかった僕に様々なことを教えてくれた。

父や兄姉が師匠と会っていたら顔をしかめたかもしれないが、僕は師匠の話を聞くのが一番好きだった。

今、僕がエリモス領の領主としてなんとかやっていけているのは、師匠から学んだ知識のおかげだろう。

魔力量を増やすための訓練方法は、師匠から教わったことの一つだ。

魔力を空そらになるギリギリまで使うというシンプルな方法であったが、これが何より効果的だった。

そのおかげで、僕は貴族の中でもトップクラスの魔力量を誇るまでになっていた。

魔力切れを起こした場合のリスクについても、もちろん師匠は教えてくれている。

それは魔力が空からになってしまうと、最悪は死いたに至るという恐ろしいものだった。だからくれぐれも気をつけるようにと言われていた。

それなのに、僕はエリモス領に赴むかいた初日に魔力切れを起こして死にかけてしまった。師匠が知ったら、きっと怒るだろう。

もう二度と会うこともないかもしれないけれど。

そんな話をする、シーヴァが僕を見上げて尋ねてきた。

『なるほど。その者は、魔力は誰もが持つ平等な力だとは言っておらんかったのか?』

「どうだったろう……そういう話はあまりしなかったかもしれない。ただ——」

僕は秘密の抜け道を使って庭に入り込み、屋敷の物置小屋でひっそりと暮らしていた師匠の言葉を思い出しながら続ける。

「確か『貴族と平民に違いなどない。いつか君がそれを真に理解した時、民は君の味方になるだろう』って言ってたっけ。それなら、魔力の有無にも違いはないってことかな?」

『ふむ。回りくどい言い方をする男じゃのう』

「男? いや、師匠はとても綺麗な女性だったよ」

いつも目深まぶかにフードをかぶっていたせいではっきりと見ることはなかったが、垣間見える部分だけでもかなり整った顔おとこをしていた女性だった。

年齢はあまりはつきりしないが、当時の母より若く見えたのは覚えている。

それを聞いて、シーヴァはニヤニヤとした調子で言う。

『ほほう。その師匠とやらがお主の初恋相手というわけなのじゃな』

「どうなんだろうね……あまりに子供すぎてよくわからなかったな。でも今思えば、好きだったのかもしれない」

幼心に、あの頃の僕は師匠に認められようと必死だったと思う。

そのおかげで僕は、鬼のような英才教育も乗り越えることができたのだ。

「つと、そんな昔のことよりも」

このままではどんな話がそれていきそうだったので、僕は無理やり本題に戻した。

「普通の人々にも魔力はあるって話を、もう少し詳しく教えてくれないか？」

「ふむ。そもそもこの世界の生き物は全て魔力を持つている。なぜなら魔力を生命活動に利用しておるからじゃ」

「そんな話は初めて聞いたよ」

僕が今まで読んできた本には、シーヴァが語ったような内容は書かれていなかった。

『じゃからあまりに一気に魔力を使うと、生命活動を維持できなくなつて死んでしまう』

僕はその言葉に、思わず苦笑いしてしまう。

「なるほど、魔力が枯渇すると倒れるのはそういう理由だったのか。確かに、もう二回くらい魔力切れで死にかけたよ」

「なんと、二回も魔力切れを起こしたくせに、随分と健康そうじゃの……ふむ、女神の加護のおかげか」

「加護か。貴族は成人の儀の時に魔法とか神具とか、何かしらの力を授かるんだ。僕の場合は【コップ】だったけど、それが守ってくれたということかな」

「ふむ、まあよい」

それからシーヴァは魔力について、僕が知らなかった色々なことを教えてくれた。

この世界には、目に見えない魔素という魔力の素になる物質がそこら中にあるらしい。

生き物は魔素を体内に取り込んで魔力に変換し、体に貯めることができる。

そしてその魔力を全身に巡らせることで、生命活動を行っているのだそうだ。

『魔力というのは、言うなれば命の塊じゃな。魔獣は魔力を豊富に持つておるから、解体されたあとも肉にはしばらく魔力が残る続ける。それが完全に失われるまでは新鮮であり続けるから、腐らないというわけじゃ』

「なるほど……」

デゼルトの町の人たちは、魔獣の肉を主食にしている。

それだけだと栄養失調に陥らないかと思つたものだが、みんなが健康でいられるのは魔獣の肉を食べることで体内に魔力を取り込んでいたからかもしれない。

「もしかしたら、この町が今もあるのはシーヴァのおかげなのかもな」

シーヴァが町の近くに遺跡を造つたおかげで、そこに魔獣が発生して、この町の人々は日々の糧を得られた。

『なんじゃ。褒めても何も出んぞ』

「いや、素直にシーヴァは凄いなって思ったただだよ」

『ふむ。やつとお主にも我の凄さがわかったか』

シーヴァは嬉しそうに尻尾を振りながら、得意満面に鼻を鳴らした。

『それではお主にもう一つ面白い話をしてやろう。この町のところどころにある女神の像と魔力についての話じゃ』

そこで言葉を切ったあと、少し間を置いてからシーヴァは語りだす。

『人々はなぜ神を模した像に祈るのかわかるか？ いや、逆じゃな。神はなぜ自分を模した像を作らせ、それに祈りを捧げさせるのか、じゃ』



シーヴァから女神様の像に関する興味深い話を聞いた数日後。

僕は領主館の中にある医務室に来ていた。

この部屋の主であるメディア先生は、基本的に地下の研究部屋にいるか試験農園に出かけているので、ほとんど留守にしている。

特に最近は魔獣の血によって育った魔植物と共に、試験農園を整備することにご執心だ。

どうやら彼女にとって魔肥料という研究素材はかなり魅力的なようで、買い取った魔獣の血のほとんどはメディア先生が実験用に使っているほどである。

しかし、エリモス領に来るまでは外へ散歩に出ることすら嫌がっていた彼女が、こうも変わるとは思わなかった。

以前は青白かったメディア先生の顔が今では血色よく見えるようになったのも、日の光を浴びるようになったおかげかもしれない。

そんな主がいない部屋、複数あるベッドの一つからゴホゴホと咳き込む音が聞こえる。僕はその人物のお見舞いに來たのだ。

「体の調子はどうかな？」

ベッドを覗き込み、額を水で濡らしたタオルで冷やして横になっている彼女にそう声をかける。

「ごほっ……随分と楽にはなったのですが、まだ……ごほっ……咳が止まらなくて」
トレードマークの眼鏡を外し、苦しそうに返事をする彼女の名はエンティア。

僕の専属教師である。

「せっかく魔獣の調査に……ごほっ……行けると聞いて色々用意していたのに……」
「きちんと寝もせずにそんなことをしていたせいで、風邪を引いたんじゃないか？」

エンティア先生は、先日領民たちの狩りに同行し、遺跡で魔獣の生態を調査する予定



だったが、当日になって体調を崩し、今も治っていない。

はしゃぎすぎて風邪を引くなんて子供みたいだ、とも思ったが、口にするのはやめておいた。

僕は額のタオルを手にとって水の入った桶に浸け、よく絞ってから再び彼女の頭に載せる。

「とにかく、今は安静にしないと。遺跡は逃げないんだから、また今度行こう」

「無念です……ごほっ……」

「あつ、そういえばエンテア先生にお土産があるんだった」

「お土産？ 一体なんの……ごほっ」

僕は持ってきていたバッグから数冊のノートを取り出す。

これは、僕とバタラが協力して作り上げた魔獣に関する資料だ。

「そのノートは？」

「僕が遺跡で見た魔獣の特徴を、覚えている範囲でまとめたんだ。わかりやすいように絵もつけたけど、それはバタラが描いたものだ」

エンテア先生は上体を起こし、僕の手からノートを受け取ってパラパラとめくる。

「素晴らしい……ごほっ……とても詳細に描かれていますね。この絵をバタラ嬢が？」

「僕も最初見た時は驚いたよ。バタラってとても絵が上手なんだよな」

立ち読みサンプル
はここまで

「これなら十分に魔獣の特徴や姿形がわかりますね……ごほっ……見事に特徴を掴んでいる、素晴らしい絵です」

エンティア先生は青い顔ながら、にっこりと微笑む。

実は最初、魔獣の絵も僕が描こうとしたんだけど、完成した絵があまりに酷（ひど）すぎると家臣のみんなに言われて、泣く泣くボツになったのだ。

バタラにも見せたら、彼女は優しく微笑みながら僕の絵を「芸術的」と言ってくれた。だが、近くにいたラファムが小さな声で『坊ちゃまの絵の才能は昔からまったく進歩してませんね』と呟（つぶや）いていたことは忘れない。

そんなことを思っていると、エンティア先生がページをめくっていた手を止めた。

「おや、このページの桐（き）々しい魔獣の絵だけ、タッチが違いますね。非現実的な形をしています。これは一体なんでしょうか？」

そう言っただけに見せてきたのは、せめてもの抵抗にと僕がこっそり描いていた魔獣の絵だった。

「それは無視してくれ」

僕が言うと、エンティア先生はハッとした顔になる。

「あつ、もしかしてこれは……わかりました……ごほっ……シアン様、ありがとうございます」

色々と察したらしい。

僕は微妙（びょう）な空気を払（はら）うように咳（せき）払いをすると、「もう一つお土産があるんだけど」とその場にしゃがみ込む。

そして病室に連れてきていたそれを持ち上げ、エンティア先生に紹介する。

「まったくそうは見えないだろうけど、これがあの遺跡を作った大魔獣。名前はシーヴァって言うんだ」

「まあ、この犬が魔獣？ ただの動物にしか見えませんが……ごほっ……もしや、何かの冗談（じやうだん）ですか？」

エンティア先生はベッド脇（わき）に置いていた眼鏡をかけ直し、シーヴァに顔を近づける。

「やっぱり、どう見てもただの犬にしか思えないのですが」

「やっぱりそう思うよね。僕もこれを最初に見た時は信じられなかったよ」

『私のことをこれ呼（よ）びわりとは失敬（しやうけい）な。我が本気を出せば、この町など一瞬で消し飛ばせるのじゃぞ』

少し不満そうに念話を飛ばすシーヴァ。

念話はエンティア先生にも飛ばしていたらしく、彼女は突然脳内に聞こえた言葉に驚きの表情で固まっている。

シーヴァはエンティア先生に向けて、片方の前足を顔の横くらいまで上げて挨拶（あいさつ）する。